

特集1

文章の道——井上義夫先生退職記念特集

近藤康裕（こんどう・やすひろ）

一九八〇年宮崎県生まれ。一橋大学大学院言語社会研究科博士課程修了。現在、東洋大学経済学部専任講師。専門は英文学。主要業績は、共著『愛と戦いのイギリス文化史 1957-2010年』（川端康雄他編、慶應義塾大学出版会、二〇一一年）など。

特集2

いまだ無き言葉へ向けて

——震災・津波・原発災害を考える

池上善彦（いけがみ・よしひこ）

前『現代思想』編集長。近刊『現代思想の二十年（仮題）』（以文社）。

イ・ヨンスク

一橋大学大学院言語社会研究科教授。専門は社会言語学。著書に『国語』という思想——近代日本の言語認識』（岩波書店、一九九六年）、

『異邦の記憶——故郷・国家・自由』（晶文社、二〇〇七年）、『ことば』という幻影——近代日本の言語イデオロギー』（明石書店、二〇〇九年）。

鶴飼哲（つかい・さとし）

一橋大学大学院言語社会研究科教授。専門はフランス文学・思想、ポスト植民地文化論。著書に『応答する力』（青土社、二〇〇三年）、『主権のかたで』（岩波書店、二〇〇八年）など。訳書にジャック・デリダ『盲者の記憶』（みすず書房、一九九八年）、ジャン・ジュネ『アルベルト・ジャコメッティのアトリエ』（現代企画室、一九九九年）など。

嶽本新奈（たけもと・にいな）

一橋大学大学院言語社会研究科博士課程。専門は近代日本史、ジェンダー史。論文に「優生学と結びつく、「在外売淫婦」批判の検討」（『ジェンダー史学』、二〇〇九年）、「分断される「女性」——愛国婦人会芸娼妓入会をめぐる」（木本喜美子・貴堂嘉之編集代表『ジェンダーと社会——男性史・軍隊・セクシュアリティ』、旬報社、二〇一〇年）、「からゆき」渡航補助

者のジェンダーと役割の二考察——「密航婦」記事を手がかりにして——」（『ジェンダー史学』、二〇一一年）。

西亮太（にし・りょうた）

一橋大学院博士後期課程在籍。専門は批評理論、ポストコロニアル研究。翻訳に、ジュディス・パトラー「平和とは戦争への恐ろしいまでの満足感に対する抵抗である」『現代思想 総特集 ジュディス・パトラー』触発する思想』（vol.312 青土社、二〇〇六）がある。

藤野寛（ふじの・ひろし）

昔、「戦後民主主義が産んだあほ」と呼ばれる。二〇〇九年、Ernst Tugendhat's Verlesungen ueber Ethik を読んで、倫理学に目覚める。そして、カント主義者になることに決める。戦後民主主義とはカント主義だった、と悟ったのだ。『高校生と大学一年生のための倫理学講義』（ナカニシヤ出版、二〇一一年）に、そのあたりの経緯を綴った。

本多創史（ほんだ・そうし）

東日本国際大学福祉環境学部准教授。専門は、

社会思想史、近代日本における公衆衛生学の成立と優生学の興隆。共著に『〈身体〉は何を語るのか——ライプラー相関社会科学8』(新世社、二〇〇三年)。共訳に『ファッショント身体』(日本経済評論社、二〇〇五年)。共訳の辞書に『障害の百科事典』(丸善、近刊予定)など。

山内明美(やまうち・あけみ)

一橋大学大学院言語社会研究科博士課程在籍。専門は日本思想史、歴史社会学。論文「自己なるコメと他者なるコメ——近代日本の〈稲作ナショナリズム〉試論——」(紀要『言語社会』二〇〇八年)。著書に『こども東北学』(イースト・プレス、二〇一一年)。共著に『東北』再生』(イースト・プレス、二〇一一年)。近刊共著に『東京／東北論』(明石書店、二〇一二年)。

山口菜穂子(やまぐち・なほこ)

明治大学商学部兼任講師。専門は英米文学・文化研究。共著に『映画のなかの社会／社会のなかの映画』(ミネルヴァ書房、二〇一一年)、『欲望・暴力・機製の境界——揺らぐ表象／格闘する理論』(作品社、二〇〇八年)、翻訳に「ホモエロティシズムを丸見えのまま隠す——デジタル・クローゼットとしてのDVD版『フット・クラブ』」(『入門・現代ハリウッド映

画講義』、人文書院、二〇〇八年)。

吉田裕(よしだ・ゆたか)

一橋大学大学院言語社会研究科博士課程後期在籍。専門は英文学。主要論文は「Mediating Imagination: The Figure of the Masses in C. L. R. James's *The Black Jacobins* and George Lamming's *In the Castle of My Skin*」(『関東英文学』9号、二〇一〇年)。「Satire, or Cannibalism: Ngũgĩ wa Thiong'o's Critique of Neocolonialism in *Devil on the Cross*」(『言語社会』5号、二〇一一年)。